

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 6 日現在

機関番号：32639

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009 ～ 2011

課題番号：21520640

研究課題名（和文）小学校英語教育を視野に入れた、子供の絵本の読み聞かせにおける理解過程の解明

研究課題名（英文）Children's understanding process of picture books from an elementary school English educational perspective

研究代表者

佐藤 久美子（SATO KUMIKO）

玉川大学・リベラルアーツ学部・教授

研究者番号：60154043

研究成果の概要（和文）：

第1に、英語の絵本の読解力に優れた子どもは、英単語の音のみならず、読み手の声の調子、絵、背景的知識、推測力など様々な学習方略を使い、内容を統合的に理解する過程が明らかになった。一方、読解力が弱い子どもは、絵にのみ集中する傾向があり、他の読解方略を有効に使うことができない、という特徴を明らかにした。

第2に、母親と子どもの対話を分析し、発話力の高い子どもの母親は応答タイミングが早く、発話時間が短く、話しかける時はゆっくりと話すという特徴を見出した。こうした読み方が、子どもの理解力を促進することが解明された。

研究成果の概要（英文）：

First, a good reader of English picture books can understand the stories using various kinds of strategies, including not only listening to English word sounds, but also looking at the pictures, using back world knowledge and guessing ability. On the other hand, a poor reader is likely to concentrate on only the pictures, and is unable to exploit hints or employ other strategies well.

Second, we investigated mother-child interaction, and found that mothers whose children's speaking ability is high exhibit three distinctive utterance features: (1) rapid response timing, (2) short utterance length, and (3) slow direct speech to their children. Consequently, the approach to reading picture books by the mothers of such children can foster the children's ability to understand picture books written in English more effectively.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：早期英語教育

1. 研究開始当初の背景

小学校に英語が必修科目として導入されることになる、という中で、どのような指導法を用いるべきかという議論があった。歌やゲームなどが主流であったが、いずれゲームは飽きることになり、かつ、学習効果が多くは期待できないと考えた。聞く・話すという活動量が高くないからである。そこで佐藤が考えたのが、絵本の読み聞かせと相互作用、という指導法の導入であった。絵本を読み聞かせることで、英語の音に親しみ、また内容を推測しながら考え、これを先生と質疑応答、あるいは、自由に話しながら読み進めることで、英語を話す機会を助長することもできると考えた。そこで、小学生はどのように英語の絵本を理解するか、その理解過程の解明を目的に掲げた。

2. 研究の目的

(1)小学生を対象とした適切な絵本の読み聞かせの指導法を考察することを最終的な目的として、そのための科学的な根拠となる、小学生の英語L2学習者と2～5歳児の日本語母語児の、絵本の理解過程及び絵本の読み聞かせの効果を明らかにすることが本研究の目的である。

(2)子どもの言語（語彙）発達や産出力を促進させる、より適切な教師の児童へのインタラクションの仕方を考察することを視野に入れて、日本語母語児と母親の、絵本の読み聞かせ時に見られる発話タイミングと母子相互作用に見られる発話内容や語彙発達、模倣力の関係を明らかにすることも本研究の目的である。

3. 研究の方法

(1)小学生を対象として英語絵本の理解過程を調査した。研究調査方法は以下の通りである。

- ①英語の意味語模倣（反復）調査
 - ②英語の絵画語彙能力テスト（Picture Vocabulary Test）
 - ③think aloud 手法による英語絵本の理解度調査
 - ④ストーリーの主観的理解度と内容理解を問う質問
- 各調査項目は、一人ずつ対面調査で行った。

(2)より適切な教師の児童へのコミュニケーションの取り方を考案することを視野に入

れ、子どもの言語発達や産出力を促進させる、遊びや絵本の読み聞かせ時における母親の発話タイミングと幼児の語彙サイズ・発話量との係わりを調査した。研究調査方法を以下に示す。

- ①日本語の無意味語模倣（反復）調査
- ②マッカーサー日本語版語彙調査
- ③母親に絵本の読み聞かせをしてもらい、その様子をビデオに記録

以上から、読み聞かせをしている時の母子の発話のタイミング、言葉の模倣数をカウントし、母子相互作用を可視化、数値化する。さらに、母親の発話内容、子どもの応答内容をカテゴリーに分類、分析する。

(3)聴取刺激が読み聞かせ（朗読）とチャンツ、歌では何が異なるのかに焦点を当て、幼児（範囲3歳7カ月～6歳3カ月児）を対象として調査を行った。①歌、②チャンツ、③朗読、④コントロールの4グループに分け、3週間それぞれの音源のCDを聞かせ、英語音の獲得効果を個別に単語反復調査を行い測定した。基礎調査として、日本語・英語の反復調査及びPVT-R絵画語彙発達調査（日本語）を行った。

4. 研究成果

(1)小学生19名を被験者として、英語絵本の理解・推測過程を調査したところ、理解が得意な児童は英単語をよく聞き取り、絵に注目し、自分の経験、背景的知識など複数のストラテジーを統合的に使い内容を理解していることが明らかになった。一方、理解が不得手な児童は、絵のみに注目する傾向が強く、複数の手掛かりを同時に使って理解することが難しい。この研究成果から、絵本を読み聞かせする時には、絵と共に、単語や音調などの英語音にも同時に注目させ、背景的知識を使い内容を推測させる指導が大切であるとのヒントを得た。

(2)母親が幼児に読み聞かせなどを行っている時の発話タイミング、発話持続時間、発話速度をカウントしたところ、発話量の多い幼児の母親の応答タイミングは、発話量の少ない幼児の母親よりも速く、また発話時間が短いこと、さらに話しかけるときの発話速度が遅いことが判明した。こうした母親の発話態度が、絵本の理解過程にも影響し、幼児が絵本の内容を話すときの発話量にも影響を与えることが明らかになった。

また、複数の調査者が保育園にて3歳児20名を対象に絵本の読み聞かせをしたところ、絵本の内容についての発話量が多い幼児を担当した調査者の発話は、子どもの発話への相槌、反復が多く、短く速い応答になっていることが分かる。これは、上記の母親の発話態度と共通している。教師側が内容に言及するのではなく、子どもの発話にすばやく反応することで、幼児の発話への意欲、関心を高めていると考えられる。

(1)と(2)より、子どもは英語音のみならず、背景的な知識や絵、読み手の声や抑揚などもヒントにして絵本を理解すること、また、母親などの読み手が子どもに対して行うインタラクションの取り方が、子どもの発話量を促す要因となること、すなわち、読み手のインタラクションの取り方も理解度に影響を与えることを明らかにした。

(3)3～5歳児における歌・チャンツ・絵本の朗読聴取による英語の語彙習得の度合いを調査した結果、読み聞かせ(朗読)が、語彙年齢、生活年齢に係わらず共通して英語音獲得効果があること、また、CDに出現していない単語音にも、朗読グループでは獲得効果が見られることを明らかにした。しかし、5歳以降では聴取刺激間に有意な差は見られなかった。

特に4歳までの未就学児では絵本の読み聞かせを行うことは英語音の獲得も効果的であり、読み手がインタラクションを工夫することで理解や発話量も促進されることが明らかになった意義は大きい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計9件)

- ① 佐藤久美子、石川翔吾、瀧田愛、語彙・生活年齢の違いにおける英語音獲得過程の分析-聴取刺激と反復力の関係-、玉川大学脳科学研究所紀要、査読有、第5号、2012、9-15
- ② 佐藤久美子、瀧田愛、教師と子どものインタラクションを促す英語絵本の読み語り、玉川大学リベラルアーツ学部研究紀要、査読無、第5号、2012、23-28
- ③ 庭野賀津子、梶川祥世、佐藤久美子、母子相互作用における母親発話の特徴-12カ月児との遊び場面における発話の分析-、東北福祉大学研究紀要査読無、第36巻、2012、251-260

④ 佐藤久美子、梶川祥世、瀧田愛、4歳児における、歌・チャンツ・朗読聴取の英語語彙獲得効果、玉川大学リベラルアーツ学部研究紀要、査読無、第4号、2011、13-17

⑤ 庭野賀津子、梶川祥世、佐藤久美子、母親による対乳児音声のプロソディの特徴：6カ月児及び9カ月児へ向けた発話の比較、玉川大学脳科学研究所紀要、査読有、第4号、2011、19-26

⑥ 佐藤久美子、子どもの語彙獲得・発話を促す母親の発話スタイルとその要因-小学校英語教育への応用を視野に入れて-、ことばの事実を見つめて：言語研究の理解と実証、査読無、2011、393-403

⑦ 佐藤久美子、佐藤綾乃、L2小学生の英語絵本の理解過程と読解ストラテジー、小学校英語教育学会紀要、査読有、第10号、2010、43-48

⑧ 佐藤久美子、桐山伸也、梶川祥世、母子相互作用における子どもの発話を促す要因：模倣と発話タイミング、玉川大学脳科学研究所紀要、査読有、第3号、2010、1-7

⑨ 佐藤久美子、梶川祥世、英語学習年齢の違いによる単語音声の習得過程の検討、玉川大学リベラルアーツ学部研究紀要、査読無、第3号、2010、7-13

[学会発表] (計10件)

- ① 庭野賀津子、梶川祥世、佐藤久美子、6カ月児へ向けた母親音声の音響的特徴-乳児の性別による比較-、日本発達心理学会第22回大会、2011年3月25日、東京学芸大学
- ② 瀧田愛、佐藤久美子、2歳児の発話力を促す母親の発話特徴：模倣時の音調、第7回子ども学会学術集会、2010年10月2日、川越市市民会館
- ③ 佐藤久美子、桐山伸也、石川翔吾、梶川祥世、子どもの発話量に影響を与える母親の発話態度、日本赤ちゃん学会第10回学術集会、2010年6月12日、東京大学
- ④ 梶川祥世、庭野賀津子、佐藤久美子、絵本を使用した遊び場面における母親の対幼児発話の分析、日本赤ちゃん学会第10回学術集会、2010年6月12日、東京

大学

研究者番号：30458202

- ⑤ 佐藤久美子、桐山伸也、石川翔吾、母子インタラクション分析に基づくコミュニケーション知の獲得、第24回人工知能学会全国大会、2010年6月11日、長崎ブリックホール
- ⑥ 佐藤久美子、梶川祥世、山下文香、瀧田愛、4歳児における、歌・チャンツ・読み話りの言語習得効果、日本発達心理学会第21回大会、2010年3月28日、神戸市国際会議場
- ⑦ 庭野賀津子、梶川祥世、佐藤久美子、コミュニケーション・ツールの違いによる母親の発話への影響 - 玩具と絵本を使用した母子相互作用場面の比較 -、日本発達心理学会第21回大会、2010年3月26日、神戸市国際会議場
- ⑧ 佐藤久美子、子ども学と言語学習からみた母子インタラクション、日本子ども学会第6回子ども学会議、2009年9月13日、お茶の水女子大学
- ⑨ 佐藤久美子、梶川祥世、歌の学習は単語の発音力を伸ばすのか？：学習年齢と音声習得効果、小学校英語学会(JES)第9回全国大会、2009年7月19日、東京学芸大学
- ⑩ 佐藤久美子、梶川祥世、単語反復は語彙力を伸ばすのか？：学習年齢の違いによる、単語の音声習得過程の違いと指導法のヒント、第30回日本児童英語教育学会(JASTEC)、2009年6月21日、大阪商業大学

(3) 連携研究者

皆川 泰代 (MINAGAWA YASUYO)
慶應義塾大学・社会学研究科・特任准教授
研究者番号：90521732

[図書] (計1件)

佐藤久美子、朝日出版社、こうすれば教えられる小学生の英語、2010、173

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐藤 久美子 (SATO KUMIKO)
玉川大学・リベラルアーツ学部・教授
研究者番号：60154043

(2) 研究分担者

梶川 祥世 (KAJIKAWA SACHIYO)
玉川大学・リベラルアーツ学部・准教授
研究者番号：70384724

庭野 賀津子 (NIWANO KATSUKO)
東北福祉大学・総合福祉学部・准教授